

小学校英語教育における文字の導入に焦点をあてた指導に関する研究：

フォニックス指導を効果的に活用した指導の在り方について

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教科・領域教育専攻 言語系コース(英語) 石濱博之研究室
南国市立日章小学校 教諭 小松昭範

1. はじめに

平成 26 年 9 月、文部科学省の英語教育の在り方に関する有識者会議において、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育の五つの提言～」が発表された。小学校においては、① 中学年での外国語活動の実施、② 高学年での教科化と「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う、という大きく 2 つの改善案が示され、従来の小学校英語教育からの大きな変革期を迎えることになる。ここで、②に注目してみると、平成 23 年度から全面実施された外国語活動では、「文字指導は行わない」という理念が広く定着している。それは、現行学習指導要領の中の「アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮する」という文言が大きな影響を与えているからである。しかし、先ほど述べた提言はこれまでの方針を一転させるものであり、どのように指導するのか、どのような内容を取扱うのかといった戸惑いや不安を感じる小学校教員は多くいると推測する。2020 年に新学習指導要領が全面実施される小学校英語教育において、このような教員の不安・指導の不透明感を取り払い、明確な意図を持って指導にあたることのできるような方向性を示すことは、重要な意味を持つだろう。そこで、本研究ではこれからの英語教育改革の中でも特に「小学校高学年における文字指導の導入」について注目し、指導の意義や在り方について考察をしていく。

2. 研究目的

本研究は、小学校英語教育において、フォニックス指導を効果的に活用した児童の発達段階に応じた文字指導についての考察をし、小学校中学年及び高学年の児童にどのような効果を与えるかということを検証することを目的としている。

3. 研究内容

(1) 先行研究の概観

小学校英語教育における文字の取扱いについての変遷、また文字指導の意義とフォニックス指導の有用性について、先行研究の概観を通して考察した。その概要は以下の通りである。

ア 文字指導に関する文部科学省の方針は、① 発達段階の視点から見て、小学校高学年に文字指導を行うことは適切である、② 中学校への円滑な接続を見据えて、小学校段階で文字の扱いや文構造への気付きなどの指導が必要である、という 2 つの理念によって位置づけられている。また、先行研究における研究者たちも、児童の知的・認知発達を考慮した上で、「分析的に言語を学ぶ」という観点から文字学習の有用性を示唆している。

イ フォニックスは英語学習入門期に学ぶ単語の大部分をカバーすることができる。小原(2016)の研究では、23 のフォニックスルールを用いることで、中学校検定教科書で扱われている単語 (614 語) のおよそ 7 割をカバーできることが証明されている。なお、数多くあるルールの全てを指導することは困難であるが、「使用頻度」と「習得のしやすさ」という 2 つの観点で内容を精選して

いくことで、効果的に指導できる可能性がある。

ウ フォニックスには規則が当てはまらない例外が存在するため、あくまでも文字学習の「1つの手立て」として指導することが重要である。また、児童が発音への戸惑いを見せたときに、分析的な視点で音を認識させるように、必要性を見極めて指導していくことも大切である。

エ 英語と日本語の音声の違いに気づき、そこに関心を持たせることがフォニックス指導の第一義である。

(2) 中学校英語科担当教員への意識調査

小学校英語教育にフォニックスを用いた文字指導を取り入れることの意義としては、「発達段階との関連性」という意味合いが大きいですが、もう一つ重要な意義として、「小学校と中学校の英語教育の接続を円滑にする」ということがある。仮に小学校で文字指導を行うことで一定の成果が得られたとしても、それが中学校に効果的に繋がらなければ、本質的な改善にはならない。そこで、まずは現状の中学校教員が文字指導に関してどのような課題を持っているか、小学校に期待することは何かということ明らかにする必要があると感じ、中学校教員へのアンケートを行うこととした。また、中学校教員がフォニックスに対してどのような認識を持っているのかということについても併せて調査を行った。調査対象は高知県と徳島県の公立中学校英語科担当教員 49 名である。以下にアンケートの分析結果を抜粋する。(具体的な結果については参考資料 1 を参照)

ア 中学校における文字指導の課題としては、「単語を正しく書くこと」と「文字と音の一致」が不十分であるということが明らかとなった。小学校で慣れ親しんできた英語の音をどのようにして文字に結び付けていくかということは、現状の大きな課題になっているようである。また、ローマ字との混同も文字指導の妨げになっていることから、ローマ字読みとフォニックス読みの違いについて、学習の初期段階から生徒に認識させる必要があると言える。

イ フォニックス指導に関しては約 6 割の中学校教員が実施しているということが明らかとなり、その効果として「スペリングの補助になる」や「発音が正確になる」といったことが挙げられるということが分かった。扱う内容に関しては「2文字子音まで」という意見が多いことから、中学生であっても習得のしやすさと使用頻度のバランスを考えて、内容を厳選しなくてはならないということが分かる。残りの約 4 割の教員はフォニックス指導を行っていないということであったが、その理由としては「指導する時間がない」「指導法を知らない」ということが多くを占めていた。指導する時間に関しては、小学校で基礎的なフォニックス指導を開始することで、改善される可能性があるかもしれない。また、指導法に関しては、未だ教員間での認識が不十分であることから、小中の校種を問わず、すべての教員が研修等で学ぶ必要があるだろう。

ウ 小学校でのフォニックス指導への期待度に関しては、全体の 7 割以上が「効果が期待できる」と回答しており、扱う内容については、1文字1音の音韻認識 (phonemic awareness) に期待する傾向が高いことが判明した。このことから、実際に小学校にフォニックス指導を導入する場合には、「1文字1音の音韻認識力の育成」に焦点を当てることが妥当であると考えられる。このことについて検証を行った先行研究は少ないので、実践調査にてその効果を検証していく。

(3) 実践調査

小学校中学年及び高学年を対象としたフォニックス指導 (1文字1音) を通して、児童の音韻認識力がどのように変化するのか、また、文字学習に対する意欲・態度にどのような変容が現れるか

ということを明らかにするために、実践調査を行った。調査対象は高知県南国市A小学校4年生 32名、5年生 35名、6年生 33名である。

ア 調査方法及び内容

本調査による指導は、基本的に筆者がT1となっていくが、発音指導に関する部分はALTもしくは英語指導補助員に担当していただいた。指導内容については、中学校教員へのアンケート結果を受けて、音韻認識 (phonemic awareness) の育成に焦点を当てたものに限定した。今回のフォニックス指導は、第4～6学年に対して同じ指導を行うことを前提としており、指導計画は全5回分 (20分×5回) である。分析については、事前・事後に実施したテストとアンケートの結果から読み取ることとした。なお、「1文字1音」に限定していることから、各アルファベットの「音」は以下のように選定した。

表1 各アルファベットの発音記号

文字	a	b	c	d	e	f	g	h	i
発音記号	æ	b	k	d	é	f	g	h	ɪ
文字	j	k	l	m	n	o	p	q	r
発音記号	dʒ	k	l	m	n	a	p	k	r
文字	s	t	u	v	w	x	y	z	
発音記号	s	t	ʌ	v	w	ks	j	z	

表2 指導計画 (2016年9月6日～9月23日) (20分×5回分)

時数	指導内容
①	・フォニックスって何?の説明 ・無声音と有声音の区別、練習 (p, b, t, d, c, g) ・英語を聞いて、はじめの音を選ぶ ・英語を聞いて、おわりの音を選ぶ
②	・フォニックスの歌 (Active Phonics) ・無声音と有声音の復習 ・5つの短母音 (a, e, i, o, u) の練習 ・3文字単語の母音を入れ替えて、発音練習 ・枝分かれゲーム
③	・フォニックスの歌 ・5つの短母音の復習 ・その他の子音の練習 (m, n, f, v, h, k, q, w) ・ポインティングゲーム
④	・フォニックスの歌 ・5つの短母音の復習 ・その他の子音の練習 (l, r, s, z, j, y, x) ・3文字単語作成 (ALTが発音した単語を、アルファベットカードを用いて作る。)
⑤	・全アルファベットの音の復習 ・アルファベットを組み合わせて3文字単語を作る ・友達同士で3文字単語クイズをする

イ 調査結果と分析 – テスト – (具体的な正答率等については参考資料2を参照)

(ア) テスト全体を通じた分析

表3 2要因の分散分析の結果

Source	SS	df	MS	F	p	ηp^2
事前・事後	2735.452	1	2735.452	136.091	.000	.584
事前・事後×学年	6.179	2	3.090	.154	.858	.003
誤差	1949.716	97	20.100			

2 要因の分散分析の結果、学年と事前事後の間に交互作用は現れなかったが、事前事後では有意な差が認められ、その効果量は.584 であった。

(i) 設問ごとの結果と分析

a 設問 1 1文字1音の音韻認識を問う問題

表 4 2 要因の分散分析の結果

<i>Source</i>	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	ηp^2
事前・事後	595.575	1	595.575	63.299	.000	.395
事前・事後×学年	22.589	2	11.295	1.200	.305	.024
誤差	912.666	97	9.409			

学年と事前事後の間には交互作用は見られなかったが、事前事後では有意差が認められ、効果量は.395 であった。全体的に事後での向上が見られるが、a, o, y に関しては事後ほうが事前よりも正答率が低くなっている。これらの誤答の傾向を分析してみると、a については e もしくは u との混同、o については a との混同、y については i との混同が、それぞれ増えているということが明らかとなった。l, v に関しては正答率の向上は見られるものの、依然として 50% を下回っていることから、児童にとって認識しづらい音であるということがいえる。

b 設問 4 母音の異なる 2 つの 3 文字単語を聞き、正しいほうを選択する問題

表 5 2 要因の分散分析の結果

<i>Source</i>	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	ηp^2
事前・事後	250.517	1	250.517	96.761	.000	.499
事前・事後×学年	5.239	2	2.619	1.012	.367	.020
誤差	251.136	97	2.589			

この設問でも事前事後の有意な差が現れ、効果量は.499 であった。o と a もしくは o と u を識別する問題は、児童にとって困難であるということが読み取れる。また、a と u を区別する場合も、同様に難易度が高かったことが分かる。これらの点について、設問 1 でも同じような結果が得られていることから、a, u, o の取り扱いには十分に配慮する必要があると言えるだろう。

c 設問 5 3 文字単語を聞き、真ん中の母音を書き込む問題

表 6 2 要因の分散分析の結果

<i>Source</i>	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	ηp^2
事前・事後	124.865	1	124.865	77.310	.000	.444
事前・事後×学年	4.428	2	2.214	1.371	.259	.027
誤差	156.667	97	1.615			

この設問でも全体に有意な差が認められ、効果量は.444 であった。やはり設問 1 や設問 4 の結果と同様に、a, o, u の 3 つの音の識別が困難であるということが言えるだろう。また、事前テストの正答が i になる問題について見てみると、hit に関しては e と誤答する割合が 40% を超えていた。ここで設問 1 (事前) を振り返ってみると、i の誤答のパターンとして一番多かったのは e であったこ

とから、フォニックス学習前は、i と e の識別が難しいということがわかる。同様に、jim についても e と誤答する割合が 50%を超えていた。

(ウ) 調査結果と分析 – アンケート –

図 1 は、事後アンケートでのみ調査したフォニックスに関する質問事項の結果である。いずれの項目においても肯定的な意見の割合が高く、「楽しかったか」「分かりやすかったか」「これからも続けていきたいか」の項目においては 9 割以上の肯定的回答を得ることができた。

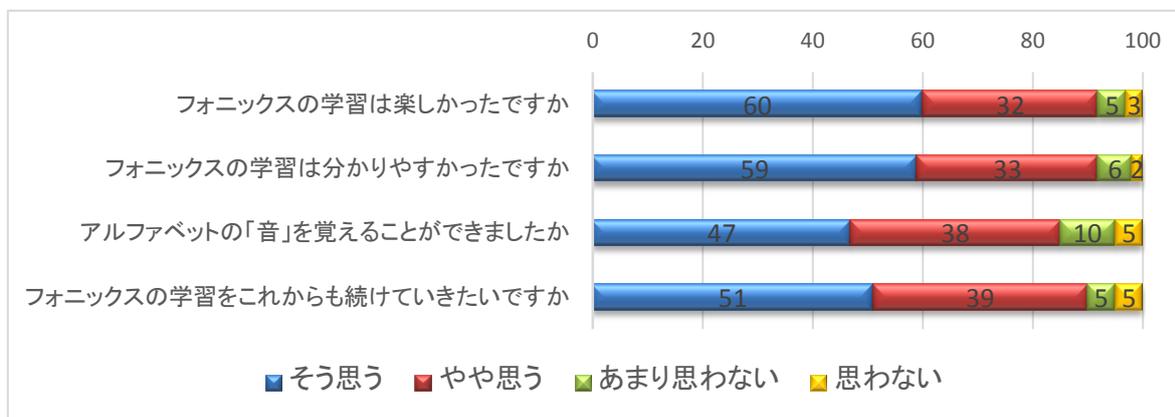


図 1 フォニックスに関する質問項目（事後のみ）

また、IBM SPSS Text Analytics for Surveys Ver.4.0.1 を用いて、児童の自由記述の感想をカテゴリー化し、その関連性を分析した。図 2 は、自由記述の中に 10 回以上の出現頻度のあるカテゴリーがそれぞれどのように関連しているかを表示したものである。なお、類似した項目は、統合して一つのカテゴリーとして扱っている。

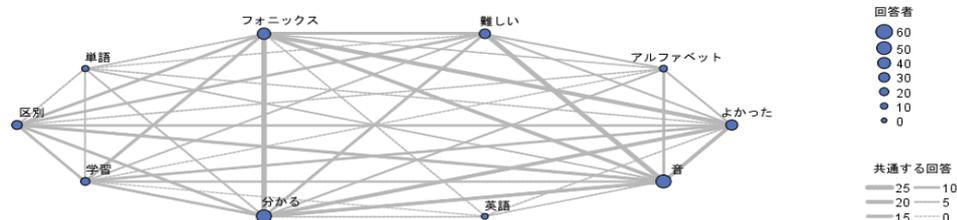


図 2 のカテゴリーの関連性を考察すると、今回の指導に関しては「フォニックス」「音」「分かる」「よかった」といった部分についての関連が強いことが分かる。ただし、「音」「区別」「難しい」といった関連性も大きいことから、学習内容の難易度については、慎重に捉えなければならないということが言えるだろう。

また、更なる具体的な調査を行うために、KJ 法による分析も行った（参考資料 3 を参照）。その結果、肯定的な感想の多くは、「アルファベットの名前と音の違いに気づけたこと」に関連するものであった。名前と音の違いに疑問を抱いていた児童にとっては、その違いを認識する良い機会になったようである。また、「ローマ字読みではいけないということに気づけた」という意見があったことも、この学習の大きな成果であると言えるだろう。難しさについての意見は、そのほとんどが「母音の識別」に関することであった。これは、テスト結果にも顕著に現れている。この苦手意識については、今後改善させるための方法を考えなくてはならない。

(エ) 調査結果からの考察

児童の音韻認識力については、4年生、5年生、6年生の学年を問わず、一定の効果を得ることができた。ただし、母音の識別に関しては必ずしも効果があったとは言えず、a と o の区別などについては余計に混乱を招いてしまった部分もある。その点に関しては、指導している段階で児童が悩んでいる様子を見て取れていたが、本調査は限られた時間での実践であったので、十分なフォローをすることができなかったというのが実際のところである。これについては、アンケートの自由記述に「a と u や a と o の区別が難しかったが、口の動きに注目すると、少しずつ分かってきた」という意見もあるように、丁寧に指導すれば改善される可能性があることから、十分な時間をかけて教えていくことが大切であろう。

学習意欲については、「フォニックスの学習は楽しかったか」や「フォニックスの学習をこれからも続けていきたいか」といった項目で9割以上の肯定的な回答を得られたことから、意欲的に学習に取り組めていたことが分かる。特に、アルファベットの名前と音の違いを認識できたということが、児童にとっては一番の学びであったようである。

全体を通して、母音の識別に対する配慮は必要であるものの、一定の効果を得られたということと、もっと学びたいという意欲が見られたことから、フォニックスを用いた音韻指導は「アルファベットの音を聞いて文字を識別する力」の育成に効果があるということが言えるだろう。

4. まとめ

(1) 教育的示唆

ア 小学校英語教育における文字指導の必要性

今後の英語教育における小中連携の更なる発展を見据えたときに、「音声から文字への接続がスムーズになされていない」という現状は、早急に改善しなければならない課題である。そのためには、小学校英語教育特有の「話すこと」「聞くこと」を中心とした音声への慣れ親しみを十分に伸ばした後に、児童が自発的に文字を学びたいという意欲が芽生えるような手立てを講じていくことが必要である。英語の文字について、児童が学びたい・知りたいと感じている部分を指導していくことで、中学校の英語教育への円滑な接続が可能になるだろう。

イ 小学校中学年及び高学年におけるフォニックスを用いた文字指導の有用性

小学校中学年及び高学年に文字指導を行う場合の1つの手立てとして、フォニックス指導を提案する。フォニックスは、書記素と音素の関連性を学ぶという点で大きな効果が期待でき、その初期段階であれば中学年と高学年の発達段階でも理解することが可能である。また、発達段階の視点から見ると、特に高学年児童において文字に対する関心が自然に高まっており、フォニックスの学習が分析的に文字と音の関連性を学ぶ良い機会と成り得る。言語についての気づきを持たせるとい意味で、フォニックスを用いることの有用性は高いといえるだろう。

ウ 小学校中学年及び高学年におけるフォニックスの具体的な指導内容

フォニックスには複雑な規則性が数多く含まれているので、その全てを取扱うことは当然不可能である。そのため、「使用頻度」と「習得のしやすさ」という2つの観点で内容を精選する必要がある。本研究では先行研究と中学校教員へのアンケートの結果から「1文字1音の音韻認識」に関する内容が妥当であるという結論に達した。この点に関しては、実践調査の結果から見ても、小学校中学年及び高学年でも十分に習得が可能であるということが明らかとなった。ただし、文

字と音の規則性を学ぶには十分な時間と丁寧な指導が必要であることから、導入にあたっては児童の実態を的確に判断し、その都度指導内容を工夫していくことが重要になるだろう。

(2) 今後の課題

本研究では小学校中学年及び高学年におけるフォニックスを用いた文字指導に焦点を当てて考察をしてきたが、まだ次の3点に関して課題が残っている。

ア 英語の文字と音の対応関係を学習するためにフォニックスに焦点を当ててきたが、フォニックスはあくまでもそれらを指導する際の1つの手法に過ぎず、それだけで全てを網羅できるものではない。また、どの文字・単語にも対応できるという点では、発音記号のほうが優れている点も否めない。そこで、より効果的な指導法を追求するためには、発音記号による指導の考察や、フォニックスと発音記号の両方の手法を取り入れた指導法の開発などが必要になるだろう。

イ 今回の実践調査は、3年前から文部科学省の英語教育強化地域拠点事業を受けているA小学校の児童を対象としたため、一般の公立小学校の児童と比較すると、テストやアンケートにおいて高い数値を示していたのではないかという疑問が残る。より正確な結論を得るためには、他の公立小学校の児童を対象とした追加調査を行い、本調査との比較をしていくことが望ましいだろう。

ウ 中学校英語科担当教員への調査で明らかとなったように、中学校現場でも未だにフォニックス指導が十分に認知されているとは言えない。ましてや小学校教員においては、その存在を知っている割合は非常に少ないことが予想される。そこで、これからフォニックスを用いた文字指導の導入を広めようとするならば、事前に十分な研修を行い、その意義や留意点について指導に携わる全教員がしっかりと認識しておく必要があるだろう。

<参考文献>

- Katz, L. and Frost R. (1992). The reading process is different for different orthographies: The orthographic depth hypothesis. In R. Frost and L. Katz (Eds.), *Orthography, phonology, morphology, and meaning*, pp. 67-84. Amsterdam: Elsevier Science Publishers.
- Tierney, R.J., and Readence, J. (2000). *Reading strategies and practices*. Boston: Allyn and Barcon.
- 小原弥生(2016). 「日本人英語学習者における Phonic Generalizations の応用性」『尚美学園大学総合政策論集』22, 167-184
- 渋谷玉輝(2011). 「早期英語教育におけるフォニックス導入の可能性」『Language & civilization』9, 113-123
- 武田千代城(2007). 「日本の中学校英語授業におけるフォニックス指導の実践」『ARELE: annual review of English language education in Japan』18, 243-252
- 松香洋子(2000). 『アメリカの子供が「英語を覚える」101の法則』東京: 講談社
- 文部科学省(2008). 『小学校学習指導要領 外国語活動編』東京: 株式会社東洋館出版社
- 文部科学省(2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

参考資料 1 中学校教員へのアンケート結果（グラフ）

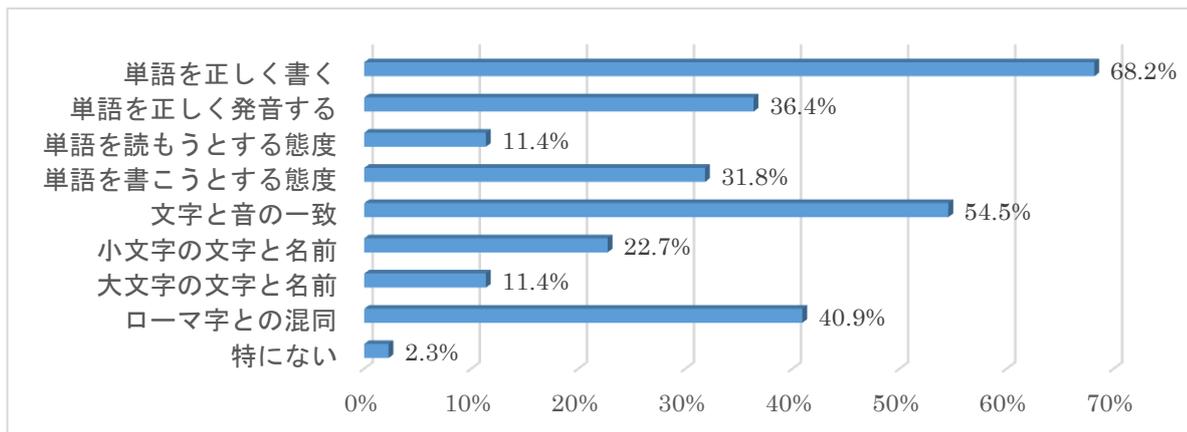


図 1 第 1 学年を指導する際に、文字・単語学習で課題になっていること

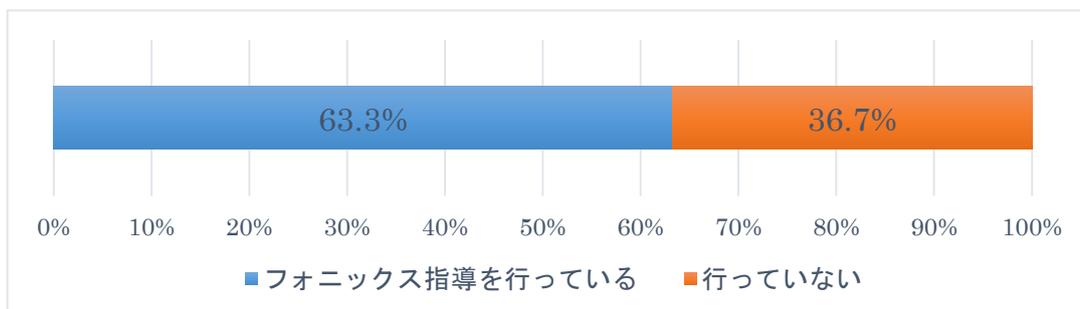


図 2 中学校でのフォニックス指導の実施状況

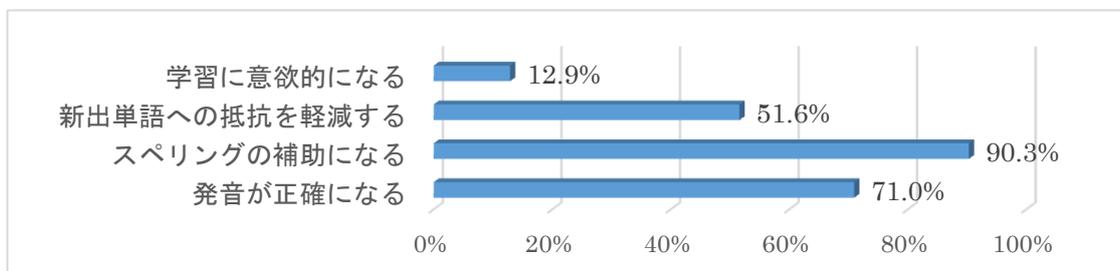


図 3 フォニックス指導を行うことで、どのような効果が得られると考えるか

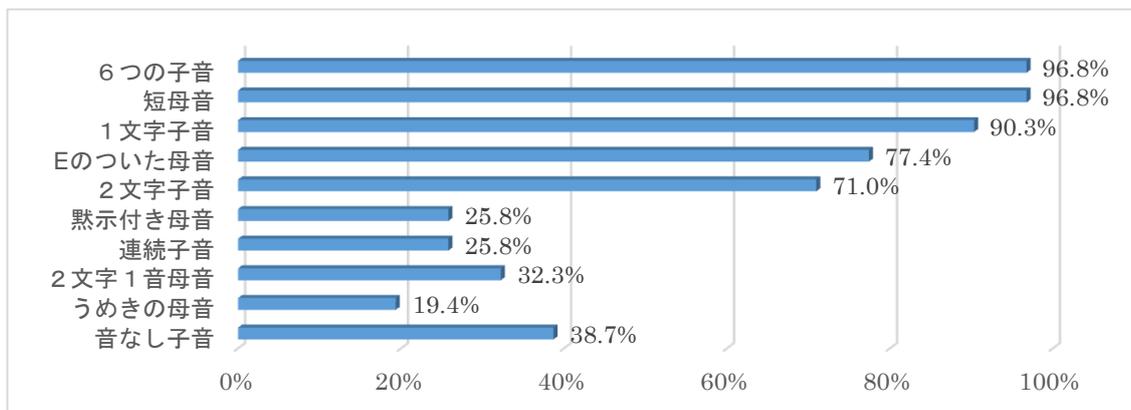


図4 どの段階までフォニックス指導を行っているか

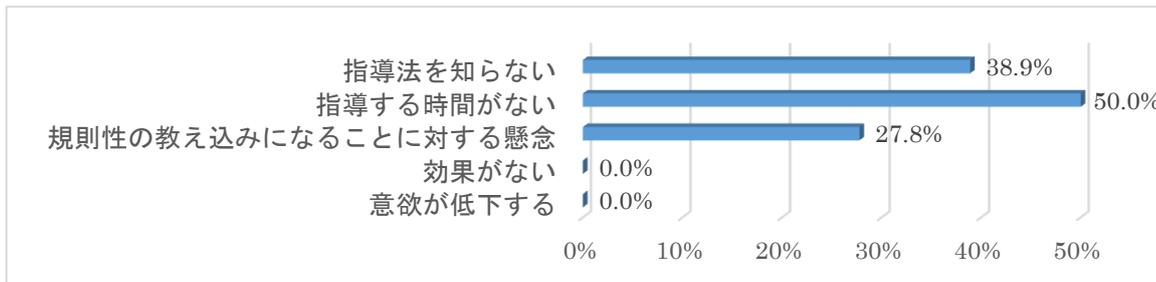


図5 フォニックス指導を行っていない理由

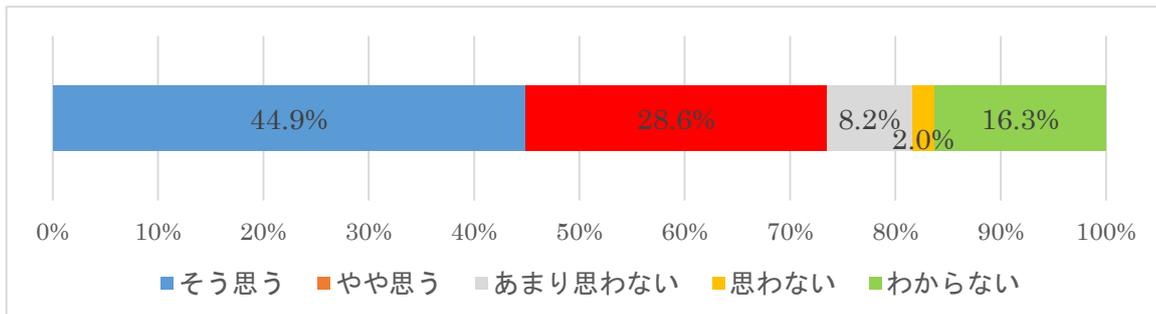


図6 小学校高学年にフォニックス指導を取り入れた場合、効果が期待できると思うか

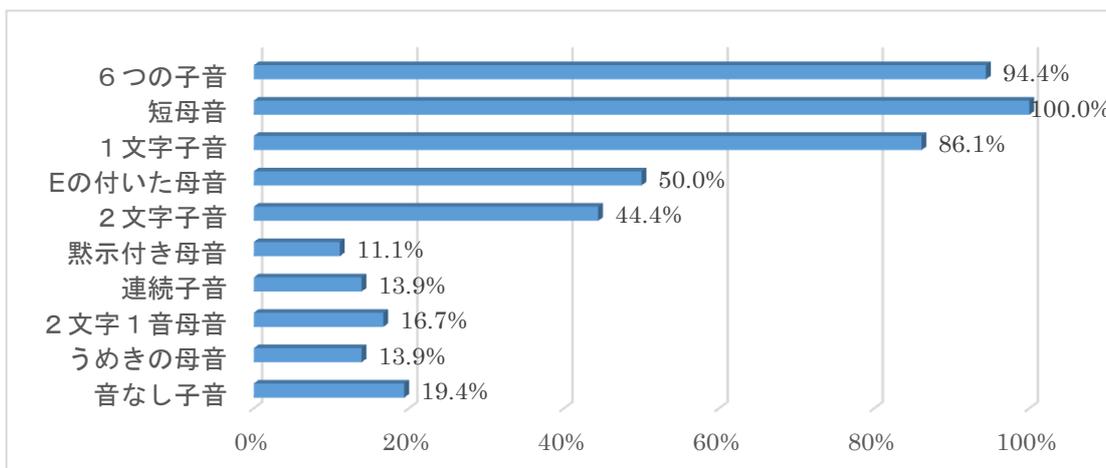


図7 小学校高学年でどの段階までフォニックス指導を行ってほしいと考えるか

参考資料2 実践調査の結果（グラフ）

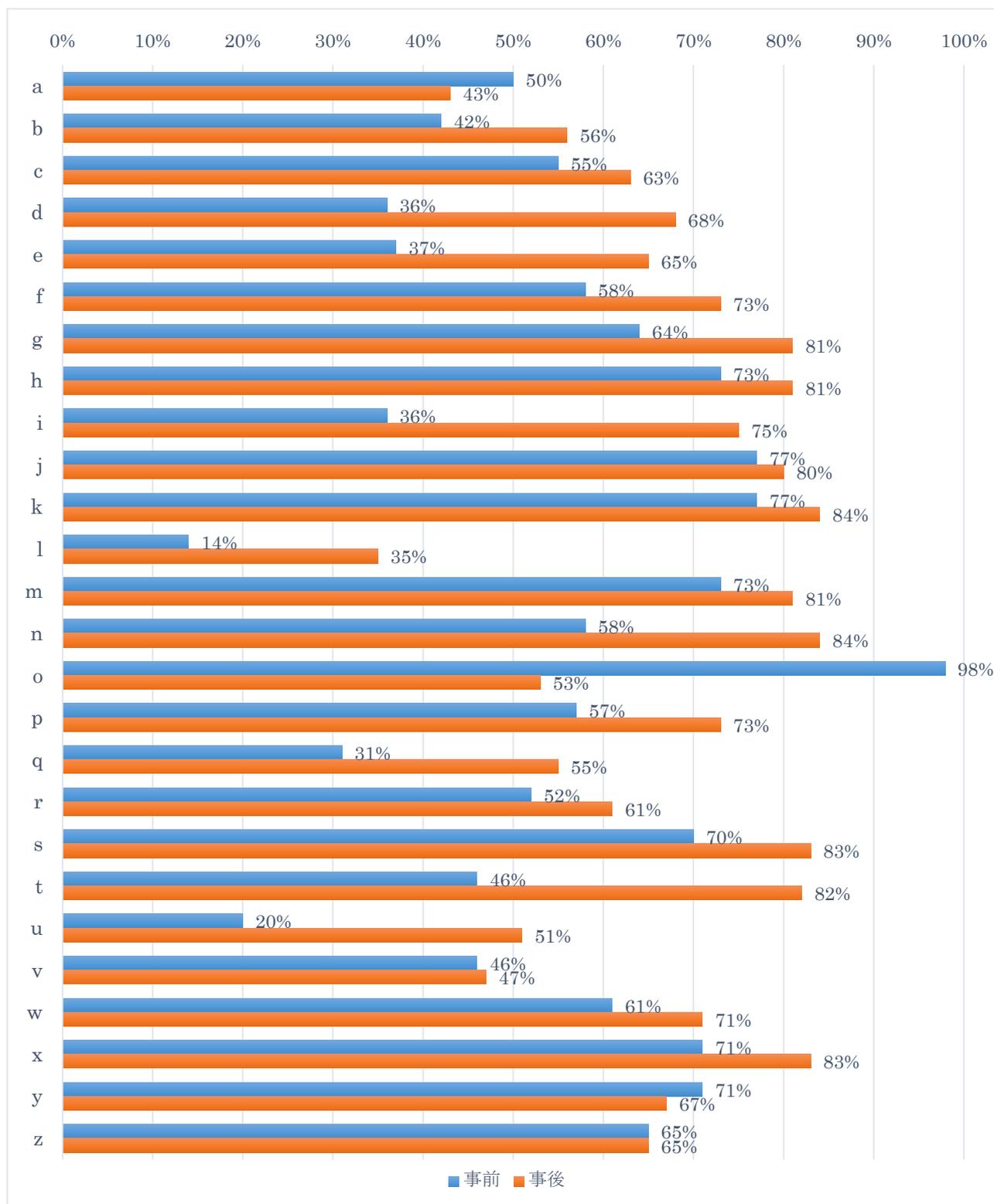


図8 設問1 1文字1音の音韻認識を問う問題の正答率（数値は3学年の合計）

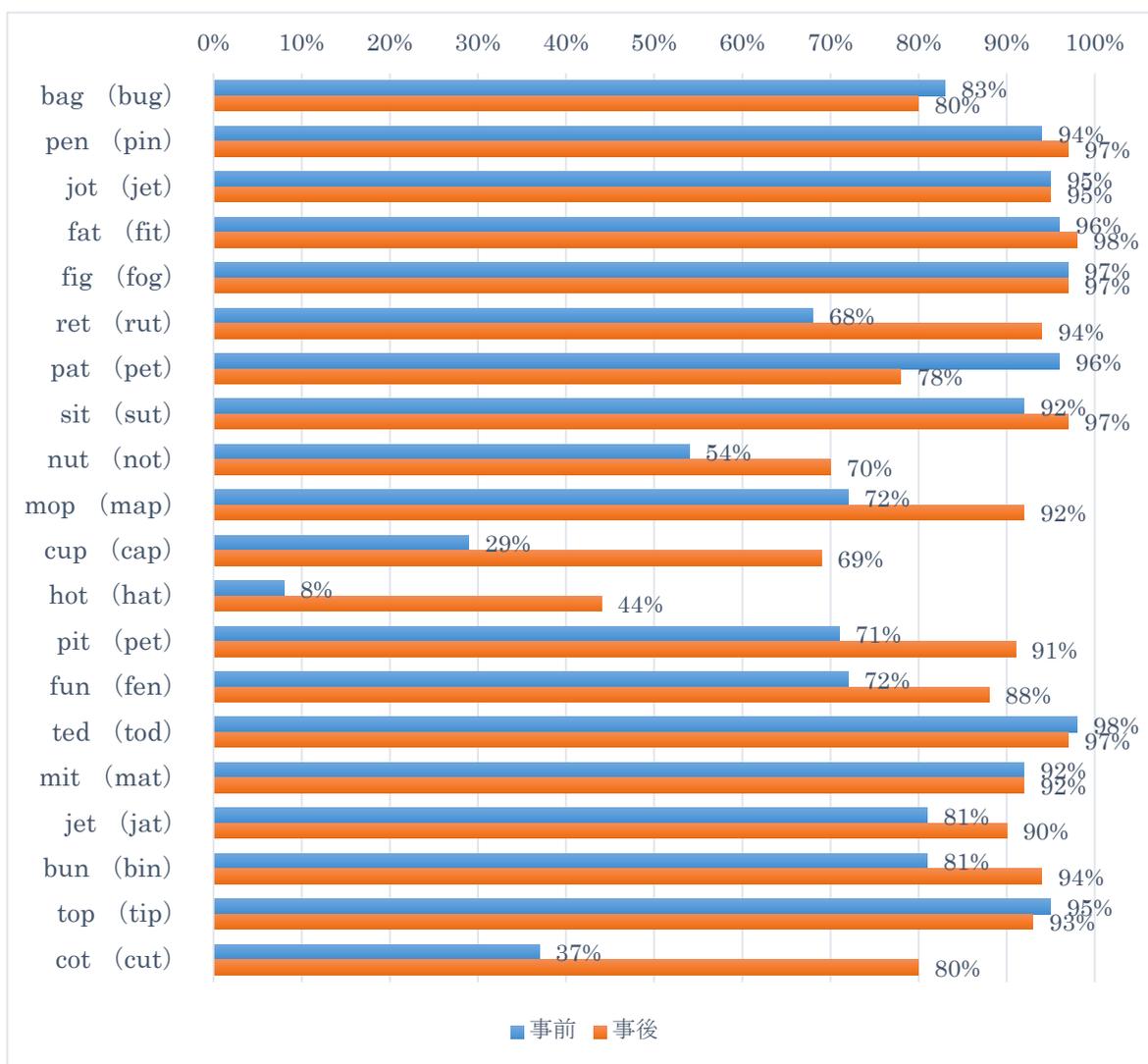


図9 設問4 母音の異なる2つの3文字単語を聞き、正しいほうを選択する問題の正答率
 ※ ()内は、誤答の選択肢の単語

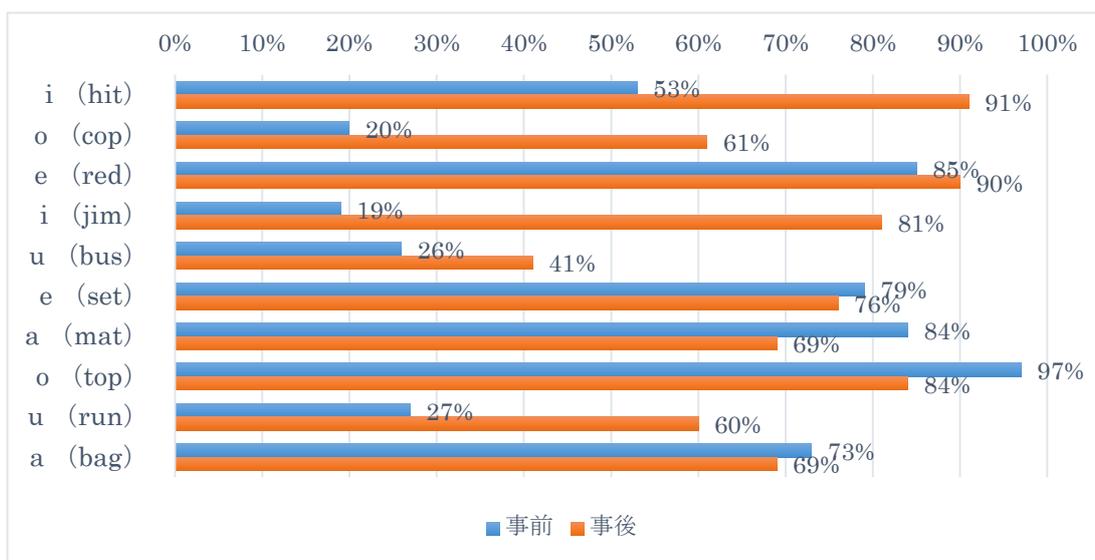


図10 3文字単語を聞いて、真ん中の母音を書き込む問題の正答率

参考資料3 KJ法による児童の自由記述の分類

表1 ーフォニックスへの関心・意欲・態度ー

《肯定的意見》	出現頻度	
これからもフォニックスの学習を続けていきたい。もっと難しいフォニックスにも挑戦したい。	18	
アルファベットへの興味が沸いてきたし、それぞれの音を知れたでよかった。	14	
フォニックスを使って、単語を読んだり書いたりできるようになりたい。	5	合計
音の違いを覚えたり知ったりすることができて、とても楽しかった。	4	47
まだ少し区別できてないところがあるので、もっとよく分かるようになりたい。	3	
喉のふるえる音やふるえない音を区別するのが楽しかった。	3	
《否定的意見》	出現頻度	
簡単だけど楽しくない。	1	1

表2 ーフォニックス学習の内容理解ー

《肯定的意見》	出現頻度	
AとUの音の違いが分かるようになった。口の動きを見たら分かった。	12	
アルファベットのそれぞれの音が分かった。覚えることができた。	10	
喉がふるえる音とふるえない音の区別がよく分かった。	6	合計
フォニックスには、同じ音や似ている音があることが分かった。	5	37
音の違いを知ることができた。	2	
フォニックスがどういうものなのかを理解できた。ローマ字読みと英語読みの違いが分かった。	2	
《否定的意見》	出現頻度	
AとUの音の違いを見つけるのが難しい	7	
全ての音を覚えることは難しかった。日本語にない音がたくさんあったので、難しかった。	7	
フォニックスの音を発音することが難しかった。	6	合計
AとUとEの区別が難しかった。	3	27
RとLの区別があまりできなかった。	3	
フォニックスの中でも、特に母音が難しかった。	1	